

こうじ 工事の げんば 現場より

旧矢筈原家住宅 保存修理事業

9月3週目

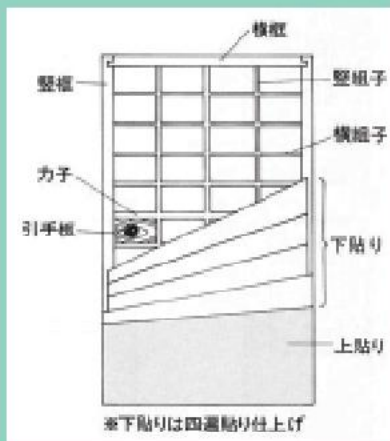
今はこんな様子だよ。



建物内外での修理作業が進む一方、建具は持ち出して外部で修理を行っています。修理前の襖は^{ふすま} 囲炉裏の煙で^{いろり} 燻^{いぶ}され変色しており、また所々シミや破れが発生し、全体も歪み劣化していました。今回修理実施に先駆け解体調査を行ったところ、内部に古い襖の表面がそのまま残されていること、またその下には移築前と推定される下地（下貼り）も残存していることが確認されました。古い襖の表面や下貼りは残せるものはそのまま内部に残し、どうしても再利用が難しい場合は、移築前からの下貼りは取り外し別途保管をし、下貼りから作り直す計画としています。建物の各所に残された歴史や記憶は、このようにして受け継いでいくのです。



工事前の室内の様子



「日本の内装材料辞典」より引用
<https://naisouzairyou-annai.jp/>

襖や屏風の表面には、絵画、書などが施された襖紙が張られています。さらにその下には、襖や屏風を補強するために、何層にもわたって紙が張り重ねられています。このように、襖や屏風を仕立てる際に表紙の下に張り重ねられた紙を、「下貼り」といいます。

紙が貴重であった時代の下貼りには、^{ほごし} 反古紙が使われました。反古紙とは、書き損じたり不要になったりした紙のことで、いわばリサイクルです。この反古紙に記された文字から過去の情報が得られることも、^{まれ} 稀にあります。



襖の表面だけを丁寧に剥がし、内部の状態を確認しました。表面の鳥の子紙の下に下貼りがあり、さらにその下に古い鳥の子紙が確認されました。再利用して存置します。



押し入れ襖は劣化が著しく、下貼りも取替が必要と判断しました。上は取外した下貼りの層。反古紙が再利用されていることが分かります。



過去のお知らせはこちら